

衣服・はなみづ・鉄道

——佐多稲子『キャラメル工場から』——

渡 部 麻 実

一 はじめに

『キャラメル工場から』（プロレタリア芸術）二九二八・二九二九は、佐多稲子のデビュー作と位置づけられる短編で、佐々木基一の評言「歯切れのいい文章と清冽な感覚。（略）自分の哀れさへの滲み出る感傷、その感傷に歯止めをくわせる正確な眼と、抑制のきいた文体。自らの可憐さに溺れることを絶対に許さぬ意地の強さと、社会意識」に代表されるように、社会意識を支えとする鋭い目により、ひろ子の置かれた現実を的確に描出した小説として高く評価されてきた。ひろ子の強い自意識に注目した長谷川啓も、「抑制した文体で、少女をとりまく苛酷な現実の一端を、鋭く切りとっている。この実感に根ざしたりアリズムの背後には、新しく獲得したばかりの階級的視点があることはいまでもない」と述べ、幼年女工となったひろ子の現実をリアルに描き出す簡潔な筆力への賞賛を示している。

こうした批評状況をふまえつつ、近年、石川巧「彼女の朝から別の朝へ」（『国語と国文学』一九九六・一〇）が、むしろその文体には「対象そのものの存在を既成の意味、紋切のニュアンスから突然薄利してしまうような、無垢な野蛮さ」が見られると述べたうえで、小説

を貫く「言語をめぐる抑圧の構造」を闡明することで新たな展開を呼び込んだ。また小林裕子「マントという記号」（『佐多稲子—体験と時間—翰林書房、一九九七・五）は、プロレタリア文学の範疇からはみ出す部分に着目し、「階級社会と家族制度という二重の抑圧」を描いた物語としてこれを位置づけた。さらに、教育と労働の現場が「共犯関係」を結び、児童を安価な労働力に仕立ててゆく構造に言及した島木圭太「プロレタリア文学と児童労働」（『立命館言語文化研究』二〇〇九・八）など、従来の解釈格子を外し、新たな視座から小説の可能性に迫る動きが活発になりつつある。

二 疎外されるひろ子

ひろ子が身を置くことになった工場労働者の日常、苛酷な労働実態の描写は、先学も評価したようにリアルである。しかし、彼女がキャラメル工場の女工になった顛末は、常識に照らせばリアリティのないもので、労働の対価が交通費に消えてしまう仕事など、プチブルくずれの父親ならではの気まぐれでしかない。

「ひろ子も、一つこれへ行って見るか」（略）ひろ子は、あまり何気なさそうな父親のその言葉にまごついた。（略）その工場ま

では電車だけで四十分はかかるはずだった。だがそれよりも彼女の日給で電車賃をつかつては間しゃくに合わないのであった。(略) しかしひろ子の父親はそんなことは考えなかった。その工場の名がいくらか世間に知れていたので、そこへ気が向いたにすぎなかった。

世間的な常識に乏しく、経済観念の欠落した父親により、幼いひろ子の通う先は、小学校からキヤラメル工場へと変更を強いられることになった。彼女は矛盾と不条理に満ちた社会によって児童労働者になったという以上に、無計画で無責任な父によってその位置に追いやられたのである。小林裕子(前掲)は以下のように指摘する。

この小説は階級の抑圧(かりにaとする)と、父親の家长的抑圧(bとする)という二重の抑圧の下であえぐ娘の苦しみを描いているが、作品の構造はbによってaがもたらされたという形になっており、そのためaよりもむしろbの家长的抑圧の方が強く印象づけられるという結果になっている。

こうして、父が自ら招いた零落とそれに付随する貧困感により、突如女工に転身させられたひろ子は、労働者らしからぬ姿のまま新たな世界に足を踏み入れる。小林は前の論稿で、以下のように述べる。

マントを着るにふさわしい過去の自分こそ、本来の姿であって、いずれはその姿に戻るはずだという矜持と希望と慰めを支えるもの、それがひろ子のマントであったわけだ。当然それは女工達との距離感も生んでいる。

このようにひろ子のマントは、「自分を外界から防御する壁であると同時に、同僚の女工の反感を買ってしまう危険な自己呈示にもなる」両義性を孕む存在であった。

さて、右の指摘に賛同したうえで、稿者がいまひとつ確認しておきたいのは、こうしたマントがもたらす距離感とは、ひろ子と女工たちの間に限定的に見出せるわけではないということだ。本小説が印象的に描き出すマントは、その衣服としての属性から、小説中に描かれる他の衣服へも自ずと注意を向けさせる。たとえば、プチブルくずれのひろ子が身に着けるマントと、労働者がまとう「印袴纏や業業服」との対照は、畢竟彼女が労働者社会のストレンジャーに他ならないことを炙り出す。マントは彼女を、女工仲間のみならず、労働者社会全体から、すなわち彼女が生きねばならない現在の現実から疎外してしまうのだ。ひろ子が、彼女の置かれた現実のなかで成績を上げることを目指している以上、少女にとってマントは、防壁である前に無意識の障壁として機能することになる。そして興味深いのは、労働者たちとの断絶をひろ子自身の認識に先立ち、というよりそれとはほとんど無関係に言立する語りの存在である。

まだ電燈のついている電車は、印袴纏や業業服で一ぱいだつた。(略) 彼女も同じ労働者であった。(略) 席をあけてくれた小父さんが言葉かけた。「お父ちゃんはどうしてんだい」／「仕事がないの」(略)「おや、あそんでるのかい。そいつはたまらないな」／そう言つて彼は親しげな顔付きをした。その車内では痛ましげな眼が一斉に彼女の姿にそそがれはしなかった。彼らにとつてはそれが自分達自身のことであり、彼女の姿は彼らの子供達の姿であつたから。(傍線引用者、以下同じ)

このようにひろ子を労働者として明確に位置づけた直後、節を改めつつ語り手は、一転して以下のように語り始める。

彼女の父親はある小都市の勤人だった。縞の洋服を着て倶楽

部で球を撞いた。

「縞の洋服」が「印袴纏や菜葉服」に對置されていることは言うまでもない。早朝の車内にひしめく「印袴纏や菜葉服」の労働者を書したすぐ後に、「縞の洋服」を着た「勤人」であつた父の姿を讀者の前に差し出し、彼らと父親、あるいは彼らの子供たちとひろ子とが決して同じではないことを暗示的に語っているのは、「彼女も同じ労働者であつた」と、先刻語つていた語り手自身にほかならない。語り手は親切な労働者の、「彼らにとつてはそれが自分達自身のことであり」云々といった認識が謬見にすぎないことを指し示し、ひろ子と労働者との一体化の通路をぷつりと断ち切つてしまふのだ。元小都市の勤め人の父や、学生の叔父を持つひろ子は、あくまで女工には不釣り合いのマントをまとつた少女なのである。このように、「キャラメル工場から」の語り手は、あるところではひろ子を労働者と一体化させ、別のところではひろ子を労働者から分離する。女工たちとひろ子を一括りにして「彼女達」と呼ぶこの語り手は、他方で、ひろ子が労働者たちと一つになり得ない事実にもまた、十分意識的なのだ。このようなあり方が、ひろ子のリアルなボジションなのである。そのことは、ゆえにひろ子のみが一人で抱えねばならなかつた独自の、個人的な辛苦があつたことを意味する。それは、プロレタリア文学という枠組のなかでは解釈のしきれない、つまり市電にひしめく労働者たちとも女工仲間とも、勿論家族とも教師とも決して共有できない、ひろ子だけの苦しみである。

三 「はなみづ」から「なみだ」へ

前節で述べたような労働者たちとひろ子との対照は、「キャラメル

ル工場から」の大きな特色を成している。ひろ子をヒロインに据えるこの小説が物語る工場の労働実態は、ゆえに、工場労働者の日常的な目線によつて捉えられたものには必ずしもならず、キャラメル工場から届けられる潜入レポート的な性格を帯びたものとなる。実際、小説は結末に向けて、労働者の悲哀を描き出すことをやめ、すなわち工場から離れ、本来ひろ子が当然保持し得るはずだつた小学校を卒業する権利さえ、父の手で取り上げられてしまつた自らの境遇に対する個人的な悲懷、あるいは怨嗟へと傾斜してゆくのである。とはいえ稿者は、このように述べることで、「キャラメル工場から」における社会意識の不徹底を指摘したいわけではない。それどころか、以下のような改稿過程には、女工の悲惨な労働実態を積極的に盛り込もうとする明瞭な痕跡を見出すこともできるのだ。

黙りこくって鑊を洗つてあるひろ子の鼻先からはなみづが落ちてきた。(初出)

黙りこくつて鑊を洗つているひろ子の鼻先からなみだが落ちてきた。

鼻先から流れ落ちるのが「なみだ」なのか「はなみづ」なのか、その違いはあまりにも大きい。真冬の地下室での壊洗いの辛さが静かな「なみだ」で表現されることがなかつたら、このシーンは、工場主の「奥さん」の「小間使」に選ばれた少女の整つた服装を見て、「伸よし」の女工が羨ましがらる様子や、「キャラメルのかげらなら食べてもよい」彼女たちが、「レモンキャラメル」のかげらをせっせと口に運ぶシーンと同等の印象しか残さなかつたであろう。ちなみに、「キャラメル工場から」ではさきのシーン以外にひろ子の涙が三度描写されている。出勤が遅れ、「家内中からかき集めた」電車

賃を無駄にしたことが発覚したとき、父からキャラメル工場での労働を命じられ学校を続けられなくなったとき、および小説末尾のシーン、すなわち「大したことでもないのだから、小学校だけは卒業する方がよからう」と認められた「郷里の学校の先生」からの手紙を読んだ直後の三カ所である。つまり初出時には、工場労働の苛酷さを伝える涙は、一切描出されていなかったことになる。

さらに言えば、初出では、遅刻により電車賃を溝に捨てたことが決定的となった前のシーンにおいて、「彼女はベソをかいていた。人通りが多くなっていた」の直後、「陽が輝いてある。女学生がほつ／＼歩いて居た」の一節が存在していたが、改稿過程でこれは丸ごと削除され、「陽が当らな」い暗い工場内でひろ子が労働に従事する時間、輝ける太陽の下、学校へと向って歩く女学生は、小説から完全に姿を消すことになった。

以上のような改稿過程に目を向けるなら、初出においてはひろ子の悲哀は、成績優秀な生徒であった少女が、無計画で浪費家の父のせいで就学と進学の機会を奪われ、「大したことでもない」はずの小学校にさえ通えなくなってしまった点に、もっとも端的に集約されていたことが見えてくる。換言すれば『キャラメル工場から』の改稿過程は、ひろ子の個人的な問題を、女工あるいは若年者の工場労働の問題に一般化させて語ろうとすること、すなわち社会的な視点のより積極的な獲得という方向に位置づけることができるのだ。

さて、陽光を浴びる女学生が姿を消した結果、太陽を独占するようになったのが、「石鹸や酒の広告板（略）」には一日中陽が当たっていた」とあるように広告看板である。石川巧（前掲）は、「キャラメルや化粧水を買う人々は広告を正面から受け止め、冷たく凍った

ご飯、粗末な雑炊、焼き芋をかき込みながら寒さに震える人々が羨望のまなざしをもって広告を「裏側」から眺めるという構図には、広告というものがもつ欺瞞性が的確に形象化されている」と指摘している。また高木圭太（前掲）は、キャラメル工場のモデルである堀越嘉太郎商店についての詳細な調査を行い、以下のように述べる。

堀越は新聞や雑誌を利用した広告戦略や懸賞や観劇・遊覧ツアーなどのキャンペーンを多用する販売戦略により業績を伸ばし、（略）大手化粧品メーカーとなった。（略）この柳原河岸にあった堀越本店こそが、佐多の通っていた「キャラメル工場」であり、そこでは各種化粧品のほかに、嗜好品「ホーカーズキート」が製造されていた。

ところで堀越嘉太郎は、一九一五年前後、青年実業家のホープ、新しい立志伝中の主役として注目を集めていたようだ。たとえば「実業界」では、一九一四年八月、一〇月、一二月の三回に渡り、「ホーカー液広告」と其経営法の解剖」と題する記事が連載され、「一大帝國」（一九一六・八）では、生い立ちと成功をつづつた特集「青年奮闘家堀越嘉太郎君」が組まれている。後者に、以下の記述がある。

ホーカー液なる華かな大きな広告は、新聞、雑誌、電車、電柱、屋根看板等に於て、恐らく何人も見ぬものはないであらう。そして今は、ホーカー白粉、ホーカー美髮液、ホーカーズキートの三つを加へて、年額売り上げ三百万円と言はれて居る。

広告戦略による堀越の成功が各所で取り上げられていた当時の状況を慮るなら、本小説が描出する唯一の陽光が広告看板にあてられていることの象徴的な意味は、さらに看過できなくなるはずだ。同記事はその後、「結婚当日から、化粧液の製造に従事」し、夫の入営

中は、「一身に引受けて事業を継続す可きことを誓」い、「成功の礎」となった堀越の妻ツル子についても十分な紙幅を割き、その賢婦人ぶりを絶賛し、さらに、成功者となった彼らの今も昔と変わらぬ慎ましい暮らしぶりを好意的に伝えてゆく。

堀越氏は（略）未だに絹物を着ずに綿服で、店員と共に麦飯を喰つて居る。（略）ツル子夫人も矢張り五年前と同じく、飯たき、雑巾がけ、何んでも襷がけで働くそうである。

ここで伝えられる夫人の姿は、小説に登場する、「大島の重ね」を着た工場主の「奥さん」とは大きく異なっている。小説中のそれは、「印袴纏や業業服」の労働者とも、プチブルを気取り「縞の洋服」を着ていた父とも違う、日常着にお金をかけるブルジョア夫人の姿である。身の回りの用を受け持つ「小間使」を雇い、「大島の重ねをきて後手をして」「立ちどま」り、黙って威圧的に視察する「奥さん」は、「襷がけ」姿からはもつとも遠い人物、労働しない人として、女たちの階級社会の、手の届かない頂点に君臨するのである。

四 プロレタリア文学のなかの鉄道

一ヶ月の工場体験ののち、ついにひろ子も、「外から帰ってくる」と、こうして熱い御飯を食べるのが何よりの楽しみよ「家へ帰ってくる」と一っぱしの働き手になった気であった」というように、女工生活への馴化の兆しを見せ始める。しかし父親は、かかる兆しが現れた直後、「いっそもうどうかね。止めにしたら」「止せ止せ（略）毎日電車賃を引きや残りやしないじゃないか」と、ひろ子の日常に再度の変更を迫る。こうしてひろ子の女工生活は呆気なく幕引きとまった。『キャラメル工場から』は、キャラメル工場の幼い女工の

物語のように見えて、その実それにはなり切れなかった少女の物語なのだ。そのように考えるなら、タイトルに含まれる格助詞「から」は、キャラメル工場からのレポートという意味のほかに、キャラメル工場からの離脱という意味をも担うものと見ることでできよう。³⁾ここではキャラメル工場から外に出ること、すなわち工場外にも目を向けることで、新たな方向に、小説の興行を見出してみたい。

佐多稲子は、『キャラメル工場から』執筆のころを振り返り、以下のように述べている。

幼いときから働かねばならなかったそんな境遇の私に、ものを書かせたのが、一九二七年当時、新たに起っていたプロレタリア文化及び文学運動であった（略）。一九二八年、「プロレタリア芸術」の二月号に「キャラメル工場から」を載せて、それが私の今日への出立になった（略）。このプロレタリア文学運動の意義が私には個人的なこととしてではなく大きくおもわれた。⁴⁾

勿論、こうした一文を参照するまでもなく、理不尽な父親のみならず過酷な工場労働によって、成長の時間と健康、あるいは矜持をも不当かつ不毛に削り取られる少女ひろ子をヒロインに据える『キャラメル工場から』が、発表当時、さらなる尖鋭化の途上にあつたプロレタリア文学運動に明確に連なるものであることは言を俟たない。ところで本小説において、キャラメル工場から一歩外に出たとき、描写の頻度と密度によって大いに目をひくものに、〈鉄道〉がある。もつとも鉄道は、プロレタリア文学の素材としてはさほど珍しくない。一例として、文戦派の作家岩藤雪夫の興味深い短編「人を喰つた機関車」〔新青年 一九三二・一〇〕を挙げておこう。タイトルにもなっている「人喰機関車」事件とは、石炭をくべる炉口に、機関

手児玉の半焼死体が発見され、助手見習の三浦も忽然姿を消したという怪奇殺人である。発生から一〇年後、三浦本人から届いた手紙により、飯屋の看板娘お京をめぐる諍いに端を発した偶発的な殺人であったという真相が明らかになる。しかし被害者の児玉が、幹部に内通して「全日本鉄道従業員組合」の活動を阻害していた「スパイ」であったことで、この殺人は組合運動と結びつき、「全世界の労働者の申合せ」にある「裏切者は×してもいい」という文句を免罪符として、「労働者の時代」を招来するための必要な犠牲であったと評価されるのだ。この小説のなかに、鉄道機関手のおかれた過酷な労働環境を訴える、以下の件がある。

当時のトンネルは地獄そのものだった。(略) どんな機関手でも火夫でも火夫見習でも、胃と腸と肺が煤煙で真黒にすすけていることは、私が言うまでもなく帝国大学の医学部の先生方が立派に証明してくれている。

煤煙については、鉄道労働者の健康被害としてしばしば取りざたされていた問題だが、加えてこの小説が発表された一九三〇年前後は、鉄道職員の賃下げに関する議論が盛んに行われていた時期にあたる。『人を喰った機関車』は、怪奇探偵小説という仕立てのなかで、鉄道労働者の過酷な就労状況を提示し、組合活動の進展と労働者の時代の到来を祈願した点で注目すべき小説であり、かつまた、さわめて時宜になつたものとして評価できる短編である。とはいえ、鉄道と労働者の関係を映した見取り図としては類型に属するものだろう。その点、『キャラメル工場から』における市電の描写は、鉄道と労働をめぐる表現として、より新奇で面白い。

一九一〇、一一年度に行われた大規模な工場衛生調査によると、

約八〇万人の工場労働者の過半数を満二〇歳未満のものが占め、なかでも女工における若年労働者の占める割合は高く、四九三四九八人の女工のうち、二八五九一九人が二〇才未満であったよう⁵⁾だ。しかしながら、一四歳未満となると三六九四二人に減り、さらに満一二歳未満のものは四六八九人にまで減少する。当時の規定では、六カ年の就学期間を終了するか、学齢の上限である一四歳をこえれば義務教育期間は終わる。ゆえに一二歳以上一四歳未満のものは義務教育を修了している可能性も少なくない。義務教育制度の徹底化が、保護者と雇用の双方に、労働による就学機会の剥奪を躊躇わせていたらしいことは多少なりともうかがえるだろう。

それにもかかわらずひろ子は、「電車賃をつかつては間しゃくに合わない」不毛な労働に従事するために、就学機会を奪われたのだ。ちなみに、東京市電は一九一六年七月にそれまでの一律五銭から七銭に値上げされるが、午前五時から七時までの早朝割引は継続しており、ひろ子の通勤が値上げ以前なら往復の運賃は八銭、以後なら一二銭となる⁶⁾。対してひろ子の賃金は、「工場ではこの間から日給制が止められて、一罐の賃金を数えるようになった。一罐七銭だった。(略) 収入が減った。ひろ子などは三分の一値下げされた」とあり、ひろ子は「二つ半」しか作れないので、計算上は、日給制の時期が二六、二五銭、日給制廃止後は一七、五銭となる。さらに女工たちは毎日一銭をおやつ、焼芋代に支出するので、日給でなおかつ往復運賃八銭なら一七、二五銭が、出来高で往復運賃一二銭なら四、五銭が一日の重労働の対価ということになる。当時は、封書切手代が三銭、はがきが一、五銭の時代である。いずれにせよ、賃金に対して通勤費の占める割合が大きすぎることは明らかだ。四、五

銭なら、ひろ子は片道の交通費にさえならない賃金のために、小学校に通う権利を取り上げられたことになってしまふ。

生活の変貌が移動手段の発達と連動していることは確認するまでもないが、ひろ子の日常を工場労働に結びつけたのも、急速に普及した市電であった。しかし、一つでも多くのキャラメルを包むために日々競争を強いられる、いわば速度が勝敗を分ける世界——〈キャラメル工場〉に通うために、電車で四〇分、徒歩なら二時間という時間を費やす彼女の労働は、徹頭徹尾ナンセンスとしか言いようがない。高速度による時間短縮に意義があるはずの電車が、ひろ子の場合には逆に、不毛な労働、徒労の原因となってしまうているのは、いかにも皮肉である。たとえば田中大介「通勤通学する身体の形成」(『ソシオロギス』二〇〇五・九)は、鉄道運行における時間厳守の重大性を指摘する一九〇二年「鉄道時報」の一節を紹介しうえて、「鉄道員の乗客に対する敬意と安全確保、とりわけ時間厳守が公衆への第一の義務」。「サービス」であり、「速度の生産が正確に行われることこそが鉄道員の至上命題」であったと指摘している。すなわち鉄道は、乗客から対価を得て、正確な速度を提供する機関に他ならない。そしてキャラメル工場もまた、正確さと高速度が重視される世界である。ひろ子は、そうした世界に身を置きながら、「女工達はみな徒歩で通える所に働き口を探す。でなければ大工場へ住み込んでしまふ」とあるように、本来なら生じるはずのない時間を節約するという矛盾に満ちた行為のために賃金の多くを失ってしまう不毛を、日々に強いられていたのである。

加えて、鉄道がサービスとして提供する時間的正確さもまた、本小説のヒロインにとっては恩恵どころか、落胆と悲哀を突きつける

たねでしかない。

その朝彼女は電車の中で遅れそうなことを感じていた。身ぎれいな女などが乗り始めていて労働者風の姿が消えていた。彼女は車内の空気で時間を見ようとするように落ちつきなく目を走らせた。(略) その時其処に吊り下がっていた割引の板札を、片手で胸から時計を引出した車掌がまくり上げてひっつけた。／＼あたりが、変ったように思われた。

車掌は早朝割引が終了する七時ちょうどであることを、彼の時計で確認し、引札を外す。それは、疑いを差し挟む余地のない絶対的な強度で、工場の始業時間に間に合わなかったことを、彼女に突きつける。電車から降り、工場に駆け付けたひろ子は「電車で、見た通り、」すでに工場には入れないこと、電車賃を支払い、賃金を得られずに帰らねばならないことを知る。

七時までという早朝割引の時間と、工場の始業時間の完全な一致、さらに、ひろ子が出会う車中の労働者たちの姿は、貧困層が仕事場に向かうための新しい交通手段としての市電のあり方を象徴的に語り出す。早朝割引というサービス形態は、労働者の市電乗車を七時までに集中させる働きをも担う。プロレタリアートとプチブルの世界は、市電の機械的な正確さによって、七時という一点を境に、無慈悲に、あるいは肅々と分かれたれているのである。

五 おわりに

さきに紹介した「人を喰った機関車」が発表されたのと同年、一九三一年の四月、「文芸春秋オール読物号」に、「地下鉄の幻想」と題する佐多の興味深い小文が掲載された。

こうごと、音響を地の底いっぱい響かせて疾走する地下鉄道の電車のおお、なんと美しいこと。間接照明の柔らかな春のような明るさ。乳白色の光沢なめらかな天井、同じ色のせんざい縦横の棒、磨かれた窓ガラス(略)しかしこの美しい電車は私たちのものじゃない。(略)窓外に近々とうつるコンクリートの壁(略)は丁度刑務所の塀のようだ。おお刑務所の塀(略)の向うには、こぶしを握り、耳をかたむけて外の情勢の微かな気配も聞きとめようとしている千人以上の我れらの同志たちがいる。(略)上野広小路、松屋前、電車がするすると広い明りの中に入って行く。(略)出口の正面はウインドウだ。鉄骨と、コンクリートのこの地下鉄におよそちぐはぐな柔らかい絹物の布が、模様華やかに裾を垂れている。(略)それにしてもこの出口へ向う階段の何という惨めさ。(略)穴倉、そして国を奪われた植民地労働者の履物もはかぬ姿、吠えろ支那の苦力の姿。

大正末期から昭和初年代にかけて、モダニズム文学とプロレタリア文学とは、前者の旗手の一人である堀辰雄と、後者を代表する中野重治や、あるいは佐多稲子との、雑誌「驢馬」を拠点としたきわめて緊密で、なおかつ疎遠でもあった関係性が互いに与え合った影響が簡単には把握できないのと同様、単純には把握し得ない関係性をもつて展開する。鉄道、電車、機械、速度といったテーマは、その両者がともに積極的に用いた素材の一つでもあった。「キャラメル工場から」において、プロレタリアートの時空間とブチブルのそれを電車が分離していたこと、そして「地下鉄の幻想」において、電車表象が、都市におけるモダニズムとプロレタリアニズムの交差点

的な位置を与えられていることを、稿者は容易に看過し得ない。

付記「キャラメル工場から」の引用は、『佐多稲子全集1』（講談社、一九七七・一一）より行った。

注(1)「解説」『日本文学全集39』新潮社、一九六一・六。

(2)「キャラメル工場から」覚書き。『現代文学』（一九八二・三）初出、『佐多稲子論』（オリジン出版センター、一九九二・七）所収。

(3) 石川巧（前掲）は、表題「キャラメル工場から」における「から」に着眼し「語り手が読者に向けてキャラメル工場の様子を報告しルポルターージュしているという見方もできるし、これから主人公が歩むことになる労働者としての生活を方向づけた場所トポスとしても考えることができる」と述べている。

(4) 「あながき 時と人と私のこと(1)」『佐多稲子全集1』（講談社、一九七七・二）

(5) 石原修『衛生学上ヨリ見たる女工ノ現況』（国家医学会、一九一四・一）

(6) ちなみに佐多がホーカーズキート工場に通い始めたのは、一九一五年（大正四）年一二月である。

(7) 下川歌史『近代子ども史年表 明治・大正編』（河出書房新社、二〇〇二・一）によると、一九一四年、幼年職工の平均時給は、一三歳男子が一錢五厘、女子が一錢三厘、労働時間は実質一三〜四時間程度であったという。